

栗田家に生まれて

栗田家では、末っ子のサキノものんびり朝寝坊というわけにはいかなかった。家族それぞれが朝の役割を持っていた。今のような目覚まし時計などあるはずもなく、物心つく頃には時間になると自分で起き、言いつけられたことをこなす毎日だった。

「おどっつぁ（父親）だけは、いっつもユルイ（囲炉裏）の横座にでっくら座ってる。なんでだべなあ？」と、不思議に眺めていたようだ。

サキノの記憶の最初にある父親は、あくせく働く家長の印象ではなかった。糖尿病を患い、診療所に通っていたせいで働けないのだと気が付いたのは少し経ってからだった。「おどっつぁには箱膳で白まんま（白米）や、黒砂糖、スイカなんて旨そうなものが出てて、病気になっといいなあ。」と、子供ながらに見ていたようだ。そんな状態であっても家長の存在は絶対だった。

そのうえ母親もリュウマチを患う身だった。すぐ上の姉を生んだ後、一年間はずっと動けない生活だったらしい。母親は父親よりは働いていたそうだが、それでも子供たちにかかる負担は大きかった。

「二人で医者通いなんては無理だと思ったんだべ。おがぁ（母親）が医者に行ったのは見た覚えねえな。本当はおがぁだって医者にかかれば違ったのかもしれねえのに」。

次の言葉を発するまでのほんのつかの間、私もサキノもそれぞれに同じ人を思い出していた。サキノの母親であり私の祖母、栗田ワサはどんな時も揺るがなかった。人知れず分別を下し、それに沿って堂々と進む人だった。その大きさを同時に愛おしんでいたような気がする。

祖父母は早くに亡くなってしまったため、栗田家は決して丈夫とは言えない両親と子供たちだけの生活だった。田植えや稲刈りには、親は田んぼまで来て言いつけてはいたが、実際に働くのは子供たちだけだった。姉たちは年も離れていたから、もう大人のように働いていた。それを見ていると、小さくても手伝うのが当たり前だった。

「その頃のここらの子めらが、みんなうちのようにだったのかって訊かれっと、おら家は特別だったんだべな。親が弱かったからな。そんじえも、それを不幸だとか、なんでおら家はこんな間に合わねえ（家計が苦しい）家なんだべ、なんて思ったことはいっぺんもねえな。やることいっぱいあって、そんなこと考えてる暇もねえし、やること終わして早く遊ぶ。それだけだったのや」。

よそと比べることなど気付きもせずに育ってしまったようだ。“この家に生まれて”を“こんな家に生まれて”と思うことは微塵もなかった。きかんぼサキは貧乏など、くたまにしない（気にしない）子供時代を過ごすこととなる。